

2017. 3. 1

現代俳句千葉

124号

巻頭エッセイ

アメリカの思い出

幹事 小高 稔



私が造船会社に入社して十四年、三十七歳の時のことです。太平洋戦争敗北の影響から抜け出して、国力は安定し高度成長期に向っていました。そのような折、アメリカの造船会社から技術援助の依頼があり、私を含む五人がニューヨークに出張することになりました。当時造船技術は日本が抽んでいました。超大国アメリカからの依頼とあって抜かりなきようにと緊張し、身が引き締まる思いでした。今では考えられませんが、その時持参した資料は七十キロにもなりました。

世界貿易センター十階にあったニューヨーク事務所から地下鉄で十分程の所にマンションを手配して貰い、早速山積みの資料を検討したり、夜中迄打合わせに明け暮れ、最初は街を散策する余裕などありませんでした。その頃驚いたことに、電話設置を申込んで翌日にすぐ設

置されたこと、当時日本ではまだ数か月かかっていました。

あまり治安がよくないブルックリンにある造船所に通う日々が続きました。仕事も何とか順調に進み、休日には何処かに出掛ける余裕も出て来ました。ニューヨークの街を歩いていると、何もわからない私達が道を尋ねられることがあり、様々な人が街に混在し発展する姿が垣間見えるようでした。そのうち馴染みの店もでき、中でも朝食に通った店のチェコ生まれのマダムが時々手づくりの菓子で暖かく接してくれ、心を和ませてもらったものでした。近くにあった国連本部には、各国の国旗がはためいていて、常に人々が行き交っていました。部屋で討議を交わしている場面を誰でも観ることができました。

今、世界のあちこちで紛争が起き、大変困難な時代ですが、人々が互いを認め合い、平和な世界になることを願って止みません。

秋風や世界友愛旗の波

秋の声メイドの気持盛り込んで

稔

目次

アメリカの思い出 小高 稔	1
諸家近詠	2~4
私の感銘句	5~9
津田沼研究句会報告	10
青葉研究句会報告	10~11
柏研究句会報告	11
新春ミニ吟行会	
早春の南房総探訪	12
ひろば 図書紹介	13
会員・会友の近況	13~14
掲示板	14

千葉県現代俳句協会会報

諸家近歌

小林 俊子

折鶴になる処方箋寒北斗
凍蝶の箱はもも色葉草園
炬明りの民話あべかわ餅二つ
春を刷る音の群像副都心
隧道の奥底濡れている遅春

白木 暢子

菜の花に聞いてみたいが間に合わず
春の蝶生まれる前から斜陽族
夏みかん居住まい正す認知症
秋の蚊のうまく言えないなむあみだ
十五歳延長線上今朝の冬

小多田文子

反すうの牛の背中にいわし雲
半券や葉となりし夏の果て
遠景が近景となり山登る
遠吠えを角出して聞かたつむり
山里の夕日に下がる烏瓜

栗山美津子

三が日我も我もと嬰抱き
しやぼん玉風の迷ひ子引き連れて
喝采の湖上かげろふオパレット
夏帽子V字カットの白い背ナ
十二月真紅のネイル厨妻

小林 雪枝

あの世から見られて日傘傾ける
若くないけど行つて見ようか春のユニクロ
風船につかまって行く天国とやら
養老院は姥捨山か夏の月
木葉髪喋りまくって帰りけり

越野 雄治

鳴外の不機嫌な髭青山椒
映す山なき下総の田水沸く
はんざきや活断層に耳澄ます
一位の実甘し鳴咽の少年期
新涼やアボカドの種ぬつと出る

白井 春こ

三角四角丸く収めて月見
くちなしの実のびつしりとぎくしゃくす
運動会一リットルの乳を飲み
なにびとか分かつてしまい鯛雲
瓢箪がつつらつら思う昼の月

黒川 秀夫

新藁を独り占めして猫眠る
露天湯の底から拾う散紅葉
秋深き隣の患者手に句帳
冷まじや浸食進む九十九里
思い出に今年も勝てず十二月

久野 康子

梅雨寒や当てなきときの盆の窪
ネモフィラの青い引力無人駅
鳶飛んでもっとも神に近き夏
かき氷こめかみそびえはじめたり
思い出すことのはじめは桑葚

島田 葉月

願ひ増殖あさがほの蔓は発条
水の輪にはあまた結界虫しげく
急くことは痛みにも似る柘榴わる
稲架組の風が高みへ自浄力
霧を出て霧を求むる心地かな

小出貴似子

権禰宜の焚上くお札年の果て
初場所のおもはず力入りてなほ
春浅きちんまり鎮座道祖神
薪を割る藻塩炊く人春の昼
からくりの木遣は春を寿ぎし

鮫島いづみ

極寒のヒマラヤを越え鶴渡る
身に入むや命をかけて生命継ぐ
残る葉の紅深む時雨かな
次の世にあえかに開く帰り花
黄蝶ひらひら曾孫と花野遊びしは夢

千葉 信子

向日葵の種のひしめく中の鬱
あきる野の雨雨雨草田男忌
鬼になるあそびビー玉うつあそび
父に父ありて積乱雲太る
硝子切る音も紙裂く音も寒

高橋 宗史

木の芽なる小さな秩序花の後
教室がまぶしい一斉の更衣
沈黙の殺意や陰のモスキート
八月の六日九日水を呑む
石仏の笑みを頂く春隣

高橋 公子

かげろうの燃えるガラス屋定休日
屋顔は写真にいない姉のよう
喪棺に飾るとすれば芒百
野分晴日本の男素手で来る
雪吊りの下にこつんと僧の立つ

諸家近歌

鈴木加寿子

葦の角闘志目覚めよ筆折るな
朱夏淡路神話の国へ鈴緒振る
バリアフリーに反古殖やす日々木守柿
裸木並木わたし夕陽に溶けそうな
菊と折鶴ハワイの一步あゆみだす

戸邊 光一

裸木となり神木の標榜す
初陣の子にキラキラと冬の川
窯元を訪ねて尖るまで風
肌合わぬ人と一緒に呑み新酒
山茶花の暮れまだ続く立話

千葉 智司

雪起し鏡のごとき人造湖
子育ての頃懐かしむ福寿草
出雲より護符届きけり花枝
急がねば私も消さる冬落暉
髪を切る決断のあり冬の梅

高橋 健文

すぐ乾く汗のTシャツ敗戦忌
もの知りで饒舌ままこのしりぬぐひ
鳳仙花はじけて水位観測所
瓢箪のくびれに貼られたる値札
褒貶を遠く有りの実をかじる

田口満代子

いつもの鍵さがす現や狐火や
鶴引くや夜光時計のうすみどり
侘しらの雉よ絵本に隠そうか
加齢ふと眠ってばかりいる金魚
さそり座をすこしずらして野分来る

杉山真佐子

西の浮力東揚力花菜畑
夕空広く白木蓮へ帰る
春の噴水設定いっそのこと女神
独白めいて花過ぎの移転先
機明かりへ火星の高しよとうむし

瀬尾 教子

寒昴夜気に総身ささくれる
蓮の骨水漬き日晒目が痛む
紅葉散る水辺のようなガラス窓
金太郎飴を思えり葱ぶつと
素通しを掛け薄氷をもてあそぶ

鈴木まんぼう

もののふの一本の道寒椿
蛇穴を出てしなやかに生き直す
蟻地獄ぼた餅寺へ八つほど
炎天下たはけの鴉鳴きにけり
出る釘になれず叩かれ蛇穴へ

栃木 きよ

赤ちゃんの涙は直球木の芽ふく
正月や母のレシビを絶やさずに
明日こそ明日こそとや木の根開く
福笑いほんとの笑顔置き去りに
双六の上りに母をまたせおり

椿 良松

梅咲いて真澄みの空の怖いほど
美しい私の朱薬自爆する
密談の卓に蜜入り冬林檎
手袋の十指それぞれにある思惑
椿落つ水の中にも別の生

徳吉洋二郎

酒を酌むだけの弔い寒椿
寒夕焼カフカの城の確と在り
夏が来る水平線を引き直し
吊り革はひとりひとつ終戦忌
八月の遠い出口を白い象

高橋由紀子

徘徊や記憶の回廊つなぐ春
わた菓子や嘘でふくらむ秋祭
冬の夜地球儀にふと波の音
惚けても母はこわれず毛糸あむ
百咲いて百のさみしさ浜屋顔

菅ノ谷文子

初雪の真つ正直な白さかな
暮れの鐘明日を模索す烏瓜
丹頂の今年の声を響かせて
飛び梅のただ一輪の花開く
年新たな物探しの日々始まりぬ

田沼美智子

倅せのミチルたとえば木の葉髪
劇場に媒逃げの椅子ありにけり
冬晴へ死に身に余る霊柩車
焼き立ての遺骨は腹の懐炉かな
ちようだいたす伝染力の若い風邪

鈴木 郁子

母子像の一指に触れて年惜しむ
智恵の輪を三つはずして風邪心地
今地吹雪という南極からスマホ
手袋を振って一瞬通じ合う
セーターのどこつまんでも柔らかい

諸家近歌

大地 節子

小春日やドクターヘリの音高し
 大國の爆買客や冬隣
 来客は九十二の母冬蓄薇
 花嫁の母となる日や梅香る
 微睡に祖母と出会いし雛の宵

高木 一恵

みちのくの沈みきれない紙の雛
 ツクツクホーシ難民選手団帰る
 柞紅葉まとい鬼の子秩父の子
 風花やかなしき骨の相寄れる
 空の青信じて堅し露の臺

田中つとむ

セロリ噛む小動物の顔をして
 明眸は隠し切れない大マスク
 独楽や山を眠らす酒五勺
 蕎麦搔や酒仙への道易からず
 寒鴉最後はごみになる覚悟

高橋 節夫

春暁や富士五湖渡る風五彩
 地震の街迷子となりし燕の子
 レントゲンわが秋愁も映しけり
 山茶花の散る坂八十路過ぎて越ゆ
 常連はジーパンで来る御慶かな

鈴木 和子

よき未来描くベン先初日記
 万象の一部となりて初日待つ
 ドロップの缶より零れ若葉光
 余生など思わぬ頃の夏の空
 紫陽花を咲かせ昔は大家族

鈴木 房州

反抗期焼芋食ふ娘の生返事
 寒鴉人見てかつかと笑いをり
 木枯や葉が擦れ合ふて歌い出す
 冬蝶のごと娘が迷ふ志望校
 小春日や沖で富士引くタグボート

高橋 由樹

花種を蒔きて忘れず三・一
 父母なくも全部ふるさと若葉風
 落花浴びてより悔しさどつとくる
 葉桜や戦はいつも隠れるて
 唾蟬も語りつぐべし沖縄戦

関 千賀子

下萌や石を撫づれば石の声
 余呉の湖暮れて蛙の鳴き交はす
 青梅雨やブリキの兵士動き出す
 蜻蛉のしだいに増ゆる火入れの儀
 胞衣壺の仄かな絵図や十三夜

千野湘山人

炉の灰の嵩よ茶道の半世紀
 人生の余白炉火掻き一人の茶
 御柱祭は先祖の祭り春隣
 手火花に戦さ経し顔浮きたてり
 白むくげかなわぬ夢を追ふ八十路

竹中 華那

丹頂喰らう獣美しその丹頂も
 冬銀河まつずぐマーガリン買いにい
 母がいて春が来よな夢でした
 てっぺんを見てから思うポプラかな
 蝦夷梅雨がろがる昇るドンガイ噛む

高桑婦美子

疑うは鬼になること豆を撒く
 除草剤除染剤麦は眠らない
 説明と説諭の四日蓮の花
 秋刀魚焼く遠い記憶の火吹竹
 この世よりあの世が恋し月今宵

津高里永子

日向ぼこぼんと飛び乗れさうな島
 使ひ捨て懐炉貼る主義貼らぬ主義
 マイナンバー通知されたる寒さかな
 いつ逢へるいつ逢へる梅白き日々
 歯が立たぬ固さのパレンタインチョコ

高野 礼子

鳥帰るドビッシー的夕暮れだ
 ひきがえる跳んで暮色のひとつかな
 片蔭は癒えゆく母の渚です
 南風吹く水の厚みのなか魚影
 毒舌の父のやさしさ刈田雨

鈴木 瑩子

麦秋や大きな声で叱られて
 まどろみの貝よりうまれ望の月
 ポケットに温もり残り夜の霧
 御慶すなわち老僧のうしろがわ
 冬薔薇正面にある発光体

木之下みゆき

風花となるみずいろの俳文学
 寒星を宿すねじ式のマリアさま
 寒潮きらきら熊野訛きらきら
 補陀落に野太き梅や一周忌
 獅子奮迅の陽炎が熊野から

私の感銘句

岩尾 可見

作者名 号頁

鶏頭の良し悪しを突く庭の鳥	横須賀洋子	120	4
迎火やあの世この世を通りゃんせ	小多田文子	120	13
春の空仰ぐ羅漢の百面相	浅野 天一	121	7
花ひいらぎ棘失せたるは昨夜の事	荒井 玲	121	7
枯木立寂しき夜は笑おうか	柏井 笙	122	3
大西日ついてくる影捨てようか	東 公子	122	11
自問自答してる蜥蜴の尻尾かな	國分 三徳	123	5
日の暮の母はいまごろ蕎麦の花	下村 洋子	123	6
あぢさるは心配性の母の色	松本 千花	123	10
睡眠を前後に分けて夜長かな	安田 時空	123	10
自問自答してる蜥蜴の尻尾かな	國分 三徳		
子供達の悪さで蜥蜴が捉えられ、残された尻尾だけが、必死に動きまわっている。			
この動きを自問自答とはうまく言い表したものだ。お見事。			

大見 充子

つっぱれどひとり寂し石榴爆ぜ	山中 頼子	120	3
つぶやきの百を地に敷き百日紅	山中 頼子	120	3
夕景は胸中に似て花水木	石井紀美子	121	7
薔薇のひらき切るまで親でゐる	伊藤 希眸	122	2
だまされてやるか白玉よく冷えて	加藤 法子	122	2
軍服の父より知らず浮いて来い	加倉井充子	123	4
地の底も良夜なるべし樹木葬	椎名 鳳人	123	4
明日死ぬと思えばよろし寒の水	金澤 恵子	123	4
千年の桜浄土へ尾を垂らす	芝崎 梓	123	5
もの思うこと止めてのち冬の蝶	黒澤 雅代	123	5

重田 忠雄

遠国のラジオのノイズ夜の金魚	門谷 杜人	120	3
読初の或る朝虫になる話	八木 邦夫	120	4
菊人形とは面影か傷痕か	渡辺 澄	121	6
行くところまで行くつもり花筏	相原 一枝	121	7
針穴より見ている俗世亀鳴けり	石井紀美子	121	7
独活の白刻む誤解のないように	青木 一夫	122	2

久保 筑峯

月光がピアノの音を狂わせる	川嶋 悦子	122	3
蛸蛸に足ラストダンスの靴がない	加倉井充子	123	4
俳句にも理系文系鬼貫忌	口村 洋子	123	5
待つ事も待たれる事も無き夜長	斎藤すす子	123	6

鈴木加寿子

敬老の日に反戦を兜太吠ゆ	松本 静頭	120	3
襟足にソースの匂い万太郎忌	矢野 忠男	120	5
官能のSLとゆく大花野	山中 葛子	120	5
マリア像の見つづけるもの著我の花	松岡 節子	120	5
白菜を割れば顕る観世音	井上けい子	121	7
寂聴も兜太も我も叫ぶ夏	池田 和人	122	2
蜻蛉より遠いところを日暮とす	塩野谷 仁	123	4
初秋のひとすじ受胎告知かな	坂間 恒子	123	4
原爆忌しずかな木からしゃべりだす	重田 忠雄	123	6
小雨降る夜神楽父の笛の音よ	佐藤美紀江	123	6

手を振り微笑む寂聴師。昨秋、兜太師の「小林一茶について」の講演会があった。一茶は流山に縁が深い。生家も近く、惹かれるものがあったのか逸話の数々二時間の熱演。寂聴師、兜太師の超越した生き様に敬意を表したい。今夏の猛暑、両師、作者の叫び声が聞こえてくる。

伊藤 希眸

城を曳く大宰の空がぐらりぐらり 松澤 龍一 120 3
 水で割る火の国の酒月おぼろ 三苫 知夫 120 4
 官能のSLとゆく大花野 山中 葛子 120 5
 裸木のむかう裸木ピカソ展 上野 紫泉 121 6
 月光がピアノの音を狂わせる 川嶋 悦子 122 3
 竹皮を脱ぐいちまいは古代裂 菊地 京子 122 3
 山霧に包まれ少女の頃になる 岡山 敦子 122 4
 軍服の父より知らず浮いて来い 加倉井允子 123 4
 一滴に無限の真昼しゃぼん玉 黒澤 雅代 123 5
 芭蕉庵萩見る我も過客なる 下村 洋子 123 6
 軍服の父より知らず浮いて来い 加倉井允子

先の戦争で父君を亡くされた、出征時の軍服姿を見送ったその時までの父君は戦死なされたのだろうと確信する。当時、私も兄達四人皆軍に入り、各々外地に赴いた。子供と嫂を残し、戦後全員帰還したがその時を思い出すと帰らなかつたらと思う時、その哀しさは計り知れない。淡々と浮いて来いとユーモアさえ感じさせる季語に、反って哀しみだけではない、怒り哀しみ諦め等の複雑な思いが溢れ出て、涙が止まらない父恋の句である。

馬淵 津枝

雨の日は雨の詩を詠む沈丁花 三苫 知夫 120 4

青岬細胞さらに動き出す 矢野 忠男 120 5
 針穴より見ている俗世亀鳴けり 石井紀美子 121 7
 冬眠のいつしようけんめいな孤独 市川 唯子 121 7
 着ぶくれる外なし政治貧しくて 池田 和人 122 2
 万愚節悪いわると片想い 菊地 京子 122 3
 この星に生れた奇跡ソーダ水 小野 功 122 4
 どうしてもひとり足らない花野かな 楠見 恵子 123 5
 頼る杖ありて朝顔咲き登る 齊藤すず子 123 6
 睡眠を前後に分けて夜長かな 安田 時空 123 10
 冬眠のいっしょうけんめいな孤独 市川 唯子

冬眠と言言葉だけに焦点をあて一気に詠み下して、緊張感をもたせている。孤独を感じると心理的な表現に、動物のみならず人間の老残の姿をもだぶらせた寂寥感ではなく、孤独に溜め込んでいた力強さが伝わる。
 破調の良さが効果を上げている。

芝崎 梓

鬼火ともみちのくはほるかに暮れて 山崎 聰 120 3
 襟足にソースの匂い万太郎忌 矢野 忠男 120 5
 官能のSLとゆく大花野 山中 葛子 120 5
 あの犬は戻れたろうか山眠る 渡辺 澄 121 6
 夕景は胸中に似て花水木 石井紀美子 121 7
 紫木蓮酸素の薄くなる虚空 浅野 文子 121 7
 地の底も良夜なるべし樹木葬 椎名 鳳人 123 4
 茶が咲いてむかしわれらに擦過傷 塩野谷 仁 123 4
 初秋のひとすじ受胎告知かな 坂間 恒子 123 4
 花火に遠く老人が耐えている 小林 実 123 4

興津 恭子

原爆忌何することもない蛇口 門谷 杜人 120 3

手袋を脱ぐ神木を潜るとき 増田 元子 120 5
 空蟬の声聴く耳のない埴輪 水沼 幸子 120 5
 九十年生きとし生きてきて臆 相原 一枝 121 7
 ひと振りに大地の匂ひ春田打つ 飯島 昭子 122 2
 飯を炊く蟬は七日の露を吸ひ 伊藤 希眸 122 2
 蝌蚪の紐大きく動く活断層 井上きよ美 122 2
 残照にただす居すまい白牡丹 金子 敏 122 4
 眞昼間の寂光まとう秋の蝶 佐々木幸子 123 4
 頼る杖ありて朝顔咲き登る 齊藤すず子 123 6
 九十年生きとし生きてきて臆 相原 一枝

現在は高齢化社会と言われて久しいが、健康で長生きでなければ意味も半減してしまう。
 元気で自立できていく健康年齢の長寿を望みとして心がけていき俳句も楽しんでいきたい。
 作者のように俳句を楽しみ達観されている御様子が臆に重なってまいります。

坂本 正夫

道変えて帰る蜻蛉に見られぬため 塩野谷 仁 123 4
 介護者の指の湿りは水中花 加倉井允子 123 4
 大の字も川の字も好き畳替 國分 三徳 123 5
 討ち入りの日の欠席を託ける 木下 昌子 123 5
 葛根湯効きし夜長のトーマス・マン 佐藤 映二 123 5
 死ぬ程に好きと云われし聖夜かな 佐久間真城 123 5
 三本のチューリップの差方程式 小池美佐子 123 5
 十月の忌日多きを力とす 小出 治重 123 5
 冬桜一番若き今日という日 金田めぐみ 123 6
 地下水の丸い手ざわり盆用意 関谷ひろ子 123 10
 十月の忌日多きを力とす 小出 治重

陽暦の十月は仲秋で、収穫の時たけなわで、自然も人間も喜びに満つる季節。しかしその内

面には凋落の予感を漂わせる。そんな十月を作者は思いを忌日に象徴させる斬新さに引きつけられる。十月には蛇笏、俳聖の芭蕉と錚々たる忌日が続きます。その忌日の力に作者は己の位置を明確にして、その決意をはっきりと強く伝える作品としている。季語を独自の句材で己を研摩する。その感性の鋭敏さに敬服。そして心地よさがある。

松本 静頭

ふらこを漕がずに語るふたりかな 小多田文字 120 13
 秋深し全ていいえと問診票 秋谷 菊野 121 6
 土割って阿弥陀の光り露の臺 若林 佐嗣 121 6
 茅花囀む故郷離れるまで少年 阿部 良治 122 2
 だんだんと子の離れゆく潮干狩 池田 和人 122 2
 姿よき秋刀魚のやうに寝てみたる 川又 優 122 3
 父の背に灸の二つ原爆忌 大澤 重市 122 11
 我らみな無頼派くずれ海鼠囀む 塩野谷 仁 123 4
 孤独死の十年日記薄暑かな 楠井 収 123 4
 枇杷咲くや母の匂ひの貼り葉 松沢 貞津 123 10
 だんだんと子の離れゆく潮干狩 池田 和人
 今まで親に頼りきっていた子のいつのまにか 遅しく成長してきた姿が目につかぶ。そこには精神的にも自立してゆく子の様子に親としての喜びと同時に一抹の淋しさのあることも否定できない。たんだんとした平易な表現の中に深い味わいのこもった佳什と思われる。

島 淑子

茅花囀む故郷離れるまで少年 阿部 良治 122 2
 たんぼ野たればぎつとブータンへ 伊藤 典子 122 2
 蝶生れる放浪癖がついたまま 青木 一夫 122 2

振り向かぬためにある蜥蜴の尻尾 加藤 法子 122 2
 戦争ににほひありけり夾竹桃 神作 仁子 122 3
 火宅抜け桜浄土に置く五体 小野富美子 122 3
 ランナーのすぎたる街の片かげり 佐々木幸子 123 4
 こまで来れば花野の誘いも悪くない 芝崎 梓 123 5
 夜蛙や出して蔵つてバスポート 佐藤 映二 123 5
 叩かれて打たれて野火の太りけり 重田 忠雄 123 6
 戦争ににほひありけり夾竹桃 神作 仁子
 年末の新潟糸魚川大火をテレビ画面で見て戦中の大空襲を思い出した。焼夷弾の匂いが強烈であった。戦後これ程の年月をへても火事を見ると匂いと共に思い出す。戦争に匂いがあるとはまことにまことである。
 季語の夾竹桃が少し景色をやわらげている。

吉野 精

一徹の胡座くずさず雪だるま 山中 頼子 120 3
 栗ご飯とうとう一人で平らげた 横須賀洋子 120 4
 退院許可二百二十日の風の中 矢野 忠男 120 5
 椿見ていて椿に見られてる 石井紀美子 121 7
 太き梁の新聞店や燕の巣 イザベル真央 121 7
 受付の金魚に懐読まれたり 加藤 法子 122 2
 背後の虚ろ曼珠沙華曼珠沙華 山崎 幸子 122 2
 風船のかたちで赤ちゃん立ち上がる 岡田 淑子 122 3
 山眠る尿瓶は尿瓶変りなし 小林 実 123 4
 どうしてもひとり足らない花野かな 楠見 恵子 123 5
 栗ご飯とうとう一人で平らげた 横須賀洋子
 本来ならばご主人と食べる栗ご飯であるが、一人で食べる。平らげたという言葉の中に哀愁がこめられている。

高橋 宗史

古都残映辻に遭ふカフカの眼 松澤 龍一 120 3
 冬薔薇に宇宙の匂いらしきもの 実桐 繁 120 3
 丁寧な仕事が出来たつむり 松澤 伸佳 120 4
 千の私語のみこんで脱ぐ花衣 水沼 幸子 120 5
 ざしぎしの花戦争にきて死せり 渡辺 澄 121 6
 眠れない夜は一つの青林檎 井上きよ美 122 2
 桃のかたちにフクシマの桃洗ふ 川又 優 122 3
 我らみな無頼派くずれ海鼠囀む 塩野谷 仁 123 4
 万緑を抜けて死がゆき青こだま 芝崎 梓 123 5
 冬桜一番若き今日という日 金田めぐみ 123 6
 古都残映辻に遭ふカフカの眼 松澤 龍一

「カフカ」は、チェコの作家フランツ・カフカと考えて間違いないだろうか。その全集や紹介本に必ず載っている白黒の顔写真は、尖った耳と大きな黒い瞳のために忘れることのできぬ印象深いものである。
 掲句は追憶である。カフカ生涯の生活の地、古都プラハ。作者は入りくんだ街並みの辻々で小説『変身』の主人公ザムザに似た孤独な眼に一回となく遭遇したのだろう。美しく暗くもある古都の佇まいを読者も想起する。

金澤 恵子

わが死後はゴミとなる本鴟の贅 小野 裕文 123 4
 パン提げて秋夕焼を見ておりぬ 佐々木幸子 123 4
 ゆさゆさと村がふくらむ秋日和 國武 和子 123 4
 冷房という水槽に居てふたり 楠見 恵子 123 5
 隣家には明日着きます蝸牛 國分 三徳 123 5
 キャンパスの歩幅大きく春立ちぬ 木下 昌子 123 5
 おーおーと神の降り来し里祭 金田めぐみ 123 6

彼の国の夫に伝言星祭

風もまた風にふかるる秋深し
銀河より届く曲ありボブ・ディラン

斉藤すず子
島田 翠松 123 6
島田 翠松 123 6

岡崎 翠

丁寧な仕事がしたいかたつむり
塩壺も妣の匂いか梅拾う

松澤 伸佳 120 4
三好美穂子 120 5

透明なことばのように小鳥来る
母という無力なるもの浮いてこい

山口 彩子 120 5
村田 珠子 120 5

皆一步海へ歩めり初日の出
しつけ糸抜いてあしたの花ころも

東 國人 121 7
渡邊 廣子 121 7

草餅の匂いの中にある慕郷
極楽へ迫る朝寝のオルゴール

青木 一夫 122 2
加倉井允子 123 4

地の底も良夜なるべし樹木葬
ぶらんこに座りこんなに脚あまる

椎名 鳳人 123 4
里見 さち 123 5

保坂 末子

おいリンゴ君の未来はジャムである
大根の花すきまだらけで明るくて

吉野 精 120 4
森 章 120 4

北斎や春を呑み込む波頭
風向きを捉えて野火が走り出す

若林 佐嗣 121 6
青木 一夫 122 2

茅花囁む故郷離れるまで少年
風船のかたちで赤ちゃん立ち上がる

阿部 良治 122 2
岡田 淑子 122 3

蝌蚪に足ラストダンスの靴がない
誰からも遠い時間を木の実降る

加倉井允子 123 4
塩野谷 仁 123 4

ゆさゆささと村がふくらむ秋日和
負独楽の傷を少女が手でつつむ

國武 和子 123 4
倉岡 けい 123 5

佐藤美奈穂

自転車降り手花火の客となる
国宝をめぐる大和路蟬しぐれ

清水 重陽 123 4
泉 志眞子 123 4

初夢や割烹着きた母に逢う

あこがれは百歳にあり菊大輪
名月や鳴り出しそうな父の尺八

金澤 恵子 123 4
小張 直子 123 5
小張 直子 123 5

大の字も川の字も好き畳替
行くわよと手を振る妻や冬銀河

國分 三徳 123 5
佐久間眞城 123 5

大クレイン冬のカオスへ突き抜けり
電工の昼餼は地べた花吹雪

久保 筑峯 123 6
重田 忠雄 123 6

薔薇散れり舞台の終り観る如く
電工の昼餼は地べた花吹雪

近藤 幸子 123 6
重田 忠雄 123 6

電気が工事をしている方の昼の食事、お話しを
しながらお弁当を広げて食べている。そこへ風

が少しあるので桜が吹雪になって広がって来る
とても楽しい昼餼、桜の花は満開、美しい景色
も浮かんできます。

細野 一敏

大つばらに泣きついた日のボインセア
人の日や潮騒のごと鍛鉄音

馬淵 津枝 120 3
三苦 知夫 120 4

煮凝は骨閉じ込めるための嘘
瓢箪の括れ正しき通り雨

吉岡 一三 120 5
山崎 幸子 122 2

反骨をトックリセーターにて包む
振り向かぬためにある蜥蜴の尻尾

池田 和人 122 2
加藤 法子 122 2

袋綴じちよとつついてバリ祭
ふらここや少しだけ現実逃避

柏井 笙 122 3
川上 典子 122 4

蜻蛉より遠いところを日暮とす
青春の日のちろろ晩年の大ちろろ

塩野谷 仁 123 4
小出 治重 123 5

青春の日のちろろ晩年の大ちろろ
ちろろとはコオロギ科の総称で秋に鳴く虫で

小出 治重 123 5
小出 治重 123 5

最もポピュラーな虫である。虫の音を楽しむ風
情は日本人独特なものらしい。作者は今、閻魔
蟋蟀を見ているのか大形でコロコロ・リリりと

鳴くも寂しくて侘しい。晩年だから侘しいのか、
侘しいから晩年なのか。若き日のちろろの音は

恋を想う華やぎを伴っていたものだ。ちろろの
繰り返しの表現の妙か、青春の日のちろろが大
ちろろになって戻って来たかのようなときめき
を感じるのには思い過ごしか。

藤井 遥
ユニクロで衝動買ひせし十二月
母という無力なるもの浮いてこい

ふくらはぎ揉んでこの世の夏に入る
寂聴も兜太も我も叫ぶ夏

不揃ひの眉を化粧ひぬ冬さくら
左手にやさしく絞る若布和

苦瓜のずきんずきんと明日かな
十二月鰯を使つてあるくなり

渋柿の札ぶら下げてありにけり
真ん中が見えてなかつた大夏野

小林 実 123 4
國分 三徳 123 5
黒澤 雅代 123 5

徳吉洋二郎
鬼火ともみちのくははるかに暮れて
おもわず咳おもわず許す純喫茶

山の 葛子 120 3
山中 葛子 120 5
愛甲 知子 121 6

木の芽風受胎告知のフレスコ画
北斎や春を呑み込む波頭

若林 佐嗣 121 6
針穴より見えている俗世亀鳴けり

石井紀美子 121 7
時鳥裏を返せば厚顔

浅野 文子 121 7
背後の虚ろ曼珠沙華曼珠沙華
伊勢海老いろいろあつて夫婦でいる

痛風の行きどころなき残暑かな
誰からも遠い時間を木の実降る

痛風の行きどころなき残暑かな
痛風の行きどころなき残暑かな
「痛風」字の通り、風が当たっても痛い、こ

の痛みは罹った人にしか分からない。作者の実験だろう。だからその痛みを行きどころなき残暑と言うことが出来たと思う。ここ数年の残暑は暑くて長くて耐えがたい。真に的を射た喻えではなからうか。

そして耐え難きことが他にもあったのではと作者の心情を伺わせる。中七の「行きどころなき」の措辞が意外性も何もない普通のことを俳句にしているこの作意に感銘した。

福田志津子

ひと振りに大地の匂ひ春田打つ
 飯島 昭子 122 2
 風向きを捉えて野火が走りだす
 青木 一夫 122 2
 唐辛子干され脇役貫きぬ
 岡田美美子 122 4
 明日死ぬと思えばよろし寒の水
 金澤 恵子 123 4
 大の字も川の字も好き畳替
 國分 三徳 123 5
 人生ゲーム枯野に橋を探しおり
 倉岡 けい 123 5
 初夢に初恋の人卒寿かな
 佐久間眞城 123 5
 追風に乗ったつもりのしんがり蟻
 小池美佐子 123 5
 おーおーと神の降り来し里祭
 金田めぐみ 123 6
 幸わせはしみじみよし文化の日
 坂本 正夫 123 6

岡田 淑子

京都から白い人来る冬が来る
 山崎 聰 120 3
 一生を夢の中にて赤い金魚
 森村 文子 120 3
 立春や最寄りの駅に待つという
 横須賀洋子 120 4
 あたらしい風小鳥来る父帰る
 渡辺 澄 121 6
 秋深し全ていいえと問診票
 秋谷 菊野 121 6
 風向きを捉えて野火が走りだす
 青木 一夫 122 2
 ふうこは鳴子百合よりさびしいか
 植原 安治 122 2
 地の底も良夜なるべし樹木葬
 椎名 鳳人 123 4

蒲の絮小伝馬町を通りぬけ
 下村 洋子 123 6
 待つ事も待たれる事も無き夜長
 斉藤すず子 123 6

瀬尾 教子

水打つや石に貌あり声のあり
 森 孝子 120 3
 京都から白い人来る冬が来る
 山崎 聰 120 3
 梨齧るなんと淋しい甘美かな
 山中 葛子 120 5
 茅花噛む故郷離れるまで少年
 阿部 良治 122 2
 蝶生れる放浪癖がついたまま
 青木 一夫 122 2
 稜線の向こうが見たい蕎麦の花
 興津 恭子 122 3
 きりきりと竜頭巻き上ぐ蟬の羽化
 金子 敏 122 4
 蜻蛉より遠いところを日暮とす
 塩野谷 仁 123 4
 絶えず疑問薄い光の枯尾花
 倉岡 けい 123 5
 ずぶ濡れの胸を抱へて霧の夜
 小出 治重 123 5

小林 実

戦前の亀のごとくに生きて冬
 山崎 聰 120 3
 踏台にのぼって下りる秋の暮
 門谷 杜人 120 3
 グロテスクな平和であるよ無患子よ
 山中 葛子 120 5
 皆一步海へ歩めり初日の出
 東 國人 121 7
 受付の金魚に懐読まれたり
 加藤 法子 122 2
 生きているから等身大に枯れる
 小川トシ子 122 3
 一木を人体としてどう芽吹く
 菊地 京子 122 3
 少年工ひとり躑躅を吸う
 楠見 恵子 123 5
 十月の忌日多きを力とす
 小出 治重 123 5
 傘寿米寿卒寿ずらりと松の内
 佐久間眞城 123 5
 グロテスクな平和であるよ無患子よ
 山中 葛子
 グロテスクな平和と言ったあと何も説明がな
 い、すべて読者にまかせて、想像に委ねている。
 季語の無患子が見事。

加納ひでこ

ぎしぎしの花戦争にきて死せり
 渡辺 澄 121 6
 反戦も木霊となつてくる田打
 明石春潮子 121 7
 玻璃壺に春のかたちの角砂糖
 池田 博臣 122 2
 四千万歩の男の一步いわしくも
 檜垣 梧樓 123 2
 自問自答しては蜥蜴の尻尾かな
 國分 三徳 123 5
 ビフテキは荷風クレソンは踊子よ
 佐藤 映二 123 5
 やれるだけやるとキヤベツの雪払ふ
 里見 さち 123 5
 風もまた風にふかるる秋深し
 島田 翠松 123 6
 故郷の墓は移さずきりたんぼ
 澤田 寿一 123 6
 叩かれて打たれて野火の太りけり
 重田 忠雄 123 6
 ぎしぎしの花戦争にきて死せり
 渡辺 澄
 「羊蹄」と書き、ギシギシと読み、花言葉は「忍耐」「朗らか」。道はたに自生、耐寒性多年草、読み調べていくうちに、刻を忘れ、「戦争にきて死せり」との、詠句に溢れるものが、ドツと押し寄せ、貴重な一日を過ごさせて頂きました。感謝です。

菊地 京子

アナログの一人の世界冬仕度
 森 ふみ子 120 4
 低音から始まる歓喜冬木の芽
 柳本 ゆみ 120 4
 壺壺も妣の匂いか梅拾う
 三好美穂子 120 5
 梨齧るなんと淋しい甘美かな
 山中 葛子 120 5
 菊人形とは面影か傷痕か
 渡辺 澄 121 6
 茶が咲いてむかしわれらに擦過傷
 塩野谷 仁 123 4
 硝子切る静けさにあり蟻地獄
 清水 伶 123 4
 母の忌の山茶花白くしろく咲く
 小張 直子 123 5
 画用紙の半分は満開秋桜
 小池美佐子 123 5
 私の噴水しかるべき円を成す
 荒木 洋子 123 6

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第二九四回 平成二十八年十一月八日

司会 徳吉洋二郎

山の上鯨の泳ぐ三回忌 大塚 弘毅
 天麩羅の天国を出て空っ風 小林 実
 いちしきを煮詰めグリムの老女かな 岡田 淑子
 やわらかな嘘の崩壊ラ・フランス 池田 博臣
 わが影の二つに分れ暮の秋 徳吉洋二郎
 詫び状の一字直す夜長かな 前島きんや
 いちよう黄葉サッチモがよく似合う 松崎あきら
 文化の日カメラ目線になる赤子 イザベル真央
 一枚のまだあたたかき朴落葉 楠見 恵子
 時雨きて流暢になる日本語 横須賀洋子
 十五歳延長線上今朝の冬 白木 暢子
 七転八起徘徊秋深む なかもと淑子
 文化の日魚焼けたと電子音 村上 澄子
 冬に入る誰も寡黙な雨の庭 股野 久子
 OBの球探しをり松茸探しをり 榎垣 梧樓
 絶対なる造形どこまでも枯野 山中 葛子
 美少年化生の仮装ハローウィン 佐藤 晏行
 無事帰国のメール着信冬立ちぬ 深山きんぎょ
 虫時雨バリとの時差は七時間 金子 未完

●第二九五回 平成二十八年十二月十三日

司会 榎垣 梧樓

達磨忌の砂糖をまぶす胡麻煎餅 榎垣 梧樓
 十二月八日牛乳石鹸で顔洗う 徳吉洋二郎
 地球映像永遠に神の留守 楠見 恵子

こまつ座の切符の半分すす払い 岡田 淑子
 天高しどすんと象の糞を作す 松崎あきら
 夜ごと美白パックをして白鳥に 金子 未完
 葉牡丹の深いところに強心剤 横須賀洋子
 ひとつ家に一つの灯り冬に入る 村上 澄子
 本棚の本がカタリと冬の夜 白木 暢子
 新宿歳晚狩人の目が動き 小林 実
 君の名を青墨で書く雪日和 山中 葛子
 大枯野地図から消えた街目指す 池田 博臣
 冬木立対角線にランドセル 股野 久子
 木枯一号スワンのポート縛られて 佐藤 晏行
 返り花昔乙女もスマートフォン 吉野 精
 万両や長生きをして命果て 大塚 弘毅
 紅葉散る池血のような色になり なかもと淑子
 十二月八日星条旗が眩しい 林 阿愚林

●第二九六回 平成二十九年一月十日

司会 徳吉洋二郎

拍子木のまえの真空霜の夜 池田 博臣
 「ん」と云って世界を呑める初日かな 松崎あきら
 寒月光足投げ出してお人形 楠見 恵子
 目葉をさして見渡す御慶かな 横須賀洋子
 不安数多水仙ひとつひらきけり 深山きんぎょ
 そちらでも七草刻む頃かしら 股野 久子
 湯たんぽや眠れば冷める愛がある 金子 未完
 初詣神はビタミン注射する 吉野 精
 爛熱くひとし忌の夜を偲びけり 徳吉洋二郎
 明るきは寝おきのままのシクラメン 岡田 淑子
 年玉と愚息差し出す茶封筒 佐藤 晏行

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館・第六会議室)

●第六十五回 平成二十八年十一月二十四日

司会 細根 葉

おかしくて耳まで笑う福笑い なかもと淑子
 初明かり遠い近いを引き寄せる 林 阿愚林
 剣道の籠手の匂いの大昨日 小林 実
 鏡餅家庭口論歯が立たず 白木 暢子
 若菜摘む腰に金魚のストラップ 前島きんや
 路地裏の家の解体石路の花 イザベル真央
 すぎなずしろはんなりと五臓六腑 村上 澄子
 初東雲阿佐田哲也と云ふ雀士 榎垣 梧樓
 当日は、故大畑会長の一週忌に当たったので、句会終了後、有志が句会場前の「サ イゼリア」で献杯をして偲びました。

黒人霊歌ピーマンの種浮遊する 越野 雄治
 大枯野昭和の列車なら行ける 細根 葉
 青春その2ポインセチアを抱いて来る 馬淵 津枝
 無為の日の匂い濃くなる柚子の傷 加藤 法子
 沖箱に海鳴り男に空っ風 長濱 聰子
 欠席の返信つるべ落としかな 石井紀美子
 恋愛に賞味期限なしボジョレヌーボー 徳吉洋二郎
 父は今銀の芒になる途中 椿 良松
 山鯨座り心地のよき木椅子 並木 邑人
 冬瓜を抱えもつ妻という同志 細野 一敏
 ぼろ市や鬼十則是捨血前 矢野 忠男
 冬林檎風を読めずにあたふたと 山崎 幸子

おびんづるの目の磨り減りし空っ風 鈴木まんぼう
寒卵終りのように転がりぬ 小林 実

●第六十六回 (平成二十八年十二月二十二日)

司会 山崎 幸子

緊急手術寒三日月が執刀す 石井紀美子
一筆箋の行間にゐる鎌鼬 越野 雄治
葱剥いて魔性が動き出す気配 三須 民恵
行く先は凡そ駈裏冬帽子 加藤 法子
場末と言われ咳ひとつする女 細野 一敏
三・一・一もう・まだ五年雪催 鈴木まんぼう
冬桜突発性痴呆症候群 長濱 聰子
天地の思いの丈を大つらら 徳吉洋二郎
煮凝や案配悪きときの黙 馬淵 津枝
賛美歌の育てし柚子の鈴なりに 吉野 精
この頃は平和あやふし藪を焼く 山崎 幸子
冬立つ日右手の使用禁止とする 並木 邑人
心仁後冬の桜は急ぎすぎ 小林 実
天高し千秋萬歳樂未央 棗 梢伊
神がかかる立派な悪妻漱石忌 椿 良松
チャルメラの闇を曳きする十二月 矢野 忠男
冬眠の真っ只中を揺り起こす 細根 栞

●第六十七回 (平成二十九年一月二十六日)

司会 加藤 法子

鼻ならわかる老人の行方 細根 栞
畝の肩尖らすだけの鋏始 加藤 法子
蓑虫の渾身地球の芯へ垂れ 越野 雄治
年新たマトリョーシ力は定位置に 三須 民恵

どんどの火自作の飾持ち帰る 棗 梢伊
大寒や夜の重さの稿起こす 石井紀美子
鏡の奥が見ている鏡餅 細野 一敏
客の月だけに見せるの踊初 並木 邑人
葉牡丹の渦中朴権恵の素顔 長濱 聰子
白鳥の首の剛直戦前か 徳吉洋二郎
水仙を愛しその下に眠る母 吉野 精
人日や宅急便のサブプリメント 鈴木まんぼう
生かされる一瞬にたどりつく独楽 馬淵 津枝
さあ急ぐ春の階段見え隠れ 山崎 幸子
狐火と戯れながら忘れけり 小林 実
二日の湯棄てたい過去の有りや無し 矢野 忠男

句会に先立ち、故大畑等前会長の一周忌
を全員黙祷で修す。句会后、有志で居酒屋
に移動し献杯。

柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー書店」2階)

●第五十四回 (平成二十八年十一月十二日)

司会 岡田 春人

大北風やガラスの天井二分に割る 野口 京子
家族の数の鯛焼と帰るかな 岡田 春人
着ぶくれて素顔さらしてをりにけり 栃木 きよ
ひと死なぬ日は無く石路の黄が灯り 下村 洋子
数学の難解回顧オリオン座 高橋 宗史
走りくる学童の風紅葉山 小林 俊子
雲降り利休鼠の磨り硝子 長井 寛
日本語の美しきソプラノ月天心 佐藤 鈴子

●第五十五回 (平成二十八年十二月十日)

司会 下村 洋子

バスが来てみないなくなる枯野かな 岡田 春人
カンカンと鳴りわたる空大畑忌 松澤 龍一
百年後のアンドロイドや漱石忌 佐藤 鈴子
新走りこころの隙間湿らせる 下村 洋子
第三の男を待ちて落葉道 井上けい子
冬の薔薇嗅ぐジプシーの顔忘れ 木之下みゆき
来し方は引き算ばかり寒茜 栃木 きよ
あさかげの沼は雑居の枯真菰 小林 俊子
憎に寒月欲望といふ電車 伊藤 希眸
合掌を象ってゆくささめ雪 長井 寛
笑い出すオウム着膨れを論ずかに 野口 京子
冬晴れの棲む地は子らのふるさとか 高橋 宗史

●第五十六回 (平成二十九年一月十四日)

司会 下村 洋子

北風や出合頭の不整脈 栃木 きよ
何となく五体満足初湯かな 岡田 春人
風だけが仲間となりし白椿 井上けい子
缶蹴りの缶の昂ぶり寒夕焼け 小林 俊子
初えびす十日の月のまだいびつ 野口 京子
AIの届かぬ聖地山眠る 佐藤 鈴子
その父を知らぬ父なり北の星 松澤 龍一
益荒男の喉元過ぎるふくと汁 長井 寛
枯葉舞い消したい過去が吹きだまる 小張 直子
くれなるの魚族水下に死なしめき 高橋 宗史
初雀タツプふみつつ庭に群れ 伊藤 希眸
冬満月見知らぬ我に出逢いたる 下村 洋子

新春ミニ吟行会

早春の南房総探訪

日時 平成二十九年一月二十二日(日)
会場 鋸南町立中央公民館
参加者 三十名
司会 徳吉洋二郎
披露 加藤法子・星野一恵



駅からは直接会場に向かう海側コースを細野一敏さん、水仙を目指すコースを小林実さん先導の二手に分かれた。水仙ロードの看板を頼りに四十分程で目的地。暖冬のため、盛りは過ぎており、見所はもつと先にあるそうだが時間の都合で引き返す。水仙は残念だったが、里山には冬桜・紅梅白梅・猫柳などの色どりと菜花の黄が山あいにあふれ、花摘みの景色など春の先取りを十分楽しめた。時折

穏やかだった正月も過ぎ、大寒まつ只中の二十一日、上々の天気の中、JR内房線千葉駅発八時六分の電車に乗る。列車はボックス席で君津を過ぎた頃から車窓には、今は山中いまは海・トンネルをくぐつてと旅情豊かな景色が続く。保田駅着九時半過ぎ、早速強い風に見舞われたが、待合室では水仙が迎えてくれた。

の強風に悩まされながらも途中の漁港には陽や鳶が飛び、湾に羽を休ませている海鳥たちを見ながら公民館に到着。隣には菱川師宣記念館、見返り美人の像もあった。

午後には三苦顧問、並木・檜垣両副会長出席のもと秀作・力作揃いの句会となった。特別選者の講評の他に地元の小野裕文さん、長濱聰子さん、入賞の石井紀美子さん、岡田淑子さんにも挨拶をして頂く。順調な進行で帰りのバスにも余裕を持って終わることが出来た。二次会組は君津で途中下車。

この地での吟行会は二十五年ぶりとのこと、地元の皆様には大変お世話になり有り難うございました。(星野一恵記)

【入賞者作品】(二句のうち一句)

歩くだけ歩き水仙の奥も風 石井紀美子
山かげに花菜の小さき海がある 保坂末子
北斎の白波くぐる冬かもめ 岡田淑子

【特別選者特選句】

(並木邑人副会長 特選)
水仙路ふいとアリアン歌いだし 田沼美智子
(檜垣梧樓副会長 特選)
房総に雄藩なくて水仙花 越野雄治

(三苦知夫顧問 特選)
北斎の白波くぐる冬かもめ 岡田淑子

【その他作品】(二句のうち一句、受付順)

寒晴れの港角切りの海鮮井 池田博臣
初旅の気分小学一年生 増田豊子
潮の香は無限水仙揺れ出づ 山崎幸子



句会風景



三苦顧問と入賞者(左より)石井紀美子さん、岡田淑子さん、三苦知夫顧問、保坂末子さん

一陣の風一山の水仙花
水仙のうしろに羅漢前に富士
刃のごと折れし水仙等亡し
見え隠れする女の意地や野水仙
風折れの水仙内耳に權の音
水仙の野卑海拔二メートル
見返れば別れ惜しげに野水仙
ろう梅や光源氏もばあちゃん子
冬かもめ番屋の昼の賑へり
戦争くるな水仙が揺れている
冬晴れや無口で並ぶめし処
咲きほこる菜花の飾る水仙ロード
水仙花束キリストが売っている
蠟梅の枝いつばいにグーのまま
句の波に乗れず水仙ロード歩く
房総の海の香りの水仙花
山姥の白き乳首囁む余寒
十重の波二十重の浪や百合鷗
現世を蹴りて海鳥飛びし冬
天空へ水仙泛べ潮風
大寒や廃校陰の金次郎
長濱 聰子
並木 邑人
三苦 知夫
保坂ミエ子
加藤 法子
檜垣 梧樓
広上 あい
小野 裕文
森 孝子
徳吉洋二郎
羽矢 真人
小高 稔
小林 実
大澤ひろみ
斉藤すず子
古賀 寿明
細野 一敏
矢野 忠男
東 國人
上野 紫泉
菊地 喜己

ひろば

■第三十七回四街道市民文化祭俳句大会

日時 平成二十八年十一月十三日
会場 四街道市文化センター

源流主宰賞

蜻蛉や百歳生さし亡母なれど 西村 峰子

市長賞

廃屋に寄り添ふやうに柿熟るる 浅見美代子

議長賞

立冬や介護終へたる姉の黙 台野 弘昭

教育長賞

天も地も病みて阿修羅や大枯野 望月 麗子

農業協同組合長賞

固まりし脳の溶けゆく秋の天 齋藤 溥子

商工会長賞

農道に足音刻む秋の暮 新澤 誠

第七位

露の身や一本の線引きて行く 池田 幸

第八位

心身の崩れ繕ふ鯛雲 置鮎 隆一

第九位

秋深し妻の呼びかけ杖代り 佐藤 徹

第十位

農機具を手放すと決め零余子めし 大庭 芳郎

(小出治重報)

図書紹介

■句集『逢萊橋』 永井 奈々
平成二十七年九月五日 アイコー企画印刷
一円玉ころがつてゆく日短か
息吸ふて吐いて百年ひよんの笛
遠まはりして春の月つれてくる

◇◇句会案内◇◇

津田沼研究句会

日時 毎月第二火曜日 午後六時より
場所 習志野市津田沼一丁目町内会館
問合せ先 横須賀洋子
(電話〇四七四七二一三〇〇〇)

青葉研究句会

日時 毎月第四木曜日 午後二時三十分より
場所 千葉市民会館
問合せ先 矢野 忠男
(電話〇四三二二五一一四三八二)

柏研究句会

日時 毎月第二土曜日 午後一時より
場所 柏市柏三丁目「ハックルベリー書店」
問合せ先 長井 寛
(電話〇四七四四五一五四九)

◆春の吟行会◆

日時 平成二十九年四月二十九日
(土・昭和の日)
場所 習志野市「谷津バラ園」「谷津干潟」
句会場 船橋市勤労市民センター
*問合せ先他、詳細は折り込みのチラシを「ご覧下さい」。

《会員・会友の近況》

・昨年古希迎えました。四十代より始めた俳句なれど、入退院の繰り返しで、十年のブランク。今は独自で楽しんでおりますが、やはり指導者不在は上達できぬとつくづく、七十歳の手習いで、また教室へ：思案中です。(栗山美津子)

・もう一つの趣味油絵で昨年初挑戦。「県展」洋画部門で初入選しました。(黒川 秀夫)

・外出のままならない車椅子の身ですが、俳句を作るときは元気になれます。少しずつ書きためた俳句を長男が句集に纏めてくれました。おかげでもう少し長生きできそうです。これからもよろしく願っています。(千葉 信子)

・氏神の役員をしていますので年末は、お焚き上げ、年始は神殿の開扉をして初詣の人達を迎えたりと、多忙でしたがお陰をもって風邪などひかず元気に過ごせました。今年は酉年良い年になるよう祈念しました。(戸邊 光一)

- ・母を九十四歳で見送った時、ほっとしたと同時に、これから自由に幅広く詠めると思ったのですが何故か母の句が多くなり、もっと広い視点で句を詠みたいと努力している今日此頃です。(高橋由紀子)

- ・両親の介護に忙しい日々を過ごしており、その合間に息抜きも兼ねて俳句を作っております。(菅ノ谷文子)

- ・義父母に続いて休む間もなく夫の介護(パーキンソン病)で三十年目の介護生活の年が明けました。背負った荷物の重さに潰れそうな時もありますが、良き仲間や子供、孫に支えられて今年も前を向いて歩き出しました。(大地 節子)

- ・最近読み返したものに大岡信(瑞穂の国のうた・新潮文庫)の「愉快な虚子」と神莫山(莫山夢幻・世界文化社)の「芭蕉ワールド」があり、最近の肩肘張った俳句評論よりもよほど面白い。(高橋 節夫)

- ・なかなか句会に出席出来ませんが、毎月、二回ほどインターネット句会で楽しく学んでおります。(鈴木 房州)

- ・俳句と茶をたのしんでおりますが、腰痛のため遠出が出来ず残念です。(千野湘山人)
- ・千葉の空はでつかいですね。道産子のわたしも文句なしの空です。「空しかなくてごめんなさい」の北海道。「空だけではありません」の千葉。どつちもダイスキです。(竹中 華那)

- ・古希を間近の私を働かせて下さる会社があり感謝、感謝で日々送っております。その合間をぬって俳句づくりをしております。(鈴木 瑩子)

■ 総会・俳句大会のお知らせ

既にお知らせした通り
三月十九日(日)に定期総会・俳句大会が、千葉市文化センターにおいて開催されます。

定期総会 十時半開会
俳句大会 十三時開催(席題発表は十時)
是非ご参加下さい。

掲示板

《会員・会友異動》

- 逝去 (会員) 岩見ちづる

- 入会 (会員) 菊池和子、堺 房男、鈴木あい、富田 茂、浜岡紀子

- 退会 (会員) 鎌田佳子、斉藤すず子、近江喜代子、柳澤満智子、田中しのえ、塩澤正子、田中正恵、林富士子、村瀬礼子、森澤照子、飯島治蝶、竹内絵視、渡辺恵子

- 移転 (会員) 大塚弘毅 (千葉市稲毛区長沼(地区内移転))

平成二十九年第一回幹事会

日時 平成二十九年一月二十四日(火) 午後六時より

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、平成二十九年定期総会資料について
- 二、俳句大会の応募状況について

- 三、一・二・四号会報について
- 四、三・四号会報の報告
- 五、平成二十九年春の吟行会について
- 六、現代俳句協会(本部)の動向について
- 七、その他

- ① 会員・会友の入退会状況
- ② 次回幹事会その他

□ 事務局・編集部だより □

- 三月十九日(日)の定期総会・俳句大会が近づいて参りました。多数のご出席をお待ちしています。

- 同封チラシの通り、四月二十九日(土・祝日)に春の吟行会を開催します。習志野市谷津のバラ園・干潟を楽しみましょう。

- 「私の感銘句」には多数の投稿を頂き有り難うございました。今号より到着順で掲載していきます。

現代俳句千葉 第一二四号

平成二十九年三月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

会長 秋尾 敏

現代俳句千葉編集部

〒261-0004 千葉市美浜区高洲 三十五六一六〇二

徳吉洋二郎

千葉県現代俳句協会事務局

〒278-0043 野田市清水五二七-10 高橋 宗史

TEL・FAX 〇四一七一二五-一三三八二